

日本原子力学会 2021年春の年会 倫理委員会セッション
「社会に役立つ原子力であるために～原子力学会の倫理規程と実際の行動～」

1. 日 時：2021年3月17日(水)13:00～14:30
2. 場 所：オンライン開催 G会場 (Zoom ルーム 7)
3. 概 要：

座長：倫理委員会幹事、日本原電 神谷 昌伸

- (1) 本企画セッションの意義 倫理規程改定における論点

倫理委員会委員長、JAEA 大場 恭子

- (2) “社会に役立つ原子力技術の追求（行動指針第2条）”とは～1F事故を踏まえて～

宮城学院女子大 大橋 智樹

資料に基づき2件の講演があり、その後、総合討論を行った。

総合討論の論点：大場委員長提示スライド

- **ワガコト意識が、時に社会以上に薄れるのはなぜか**
 - 想定外を想定内にする取り組みによる「安心」?
- **偶然の結果、起きたことを防ぐだけの対策からの脱却→プロセス評価**
 - 誰がするのか
 - “事前”に“ステイクホルダー”との協議ができるのか
 - 協議結果は、社会と共有できるのか→へび使いには必要となる(科学以外の言葉による)コミュニケーション力がKeyになる?
 - みんなで「なぜそれがおきるのか」「なぜかわれないのか」を社会と考える
 - 起きた後、“主張する場”を学会あるいは倫理委員会は設定できるか(もしそれができたら、1F事故後～現在にながかわっていたらだろうか?現在起きている事象も変わるか?)

総合討論の概要

- (大場) “ワガコト意識”が当事者であっても薄れることは当たり前とは言え、なぜ時に社会以上に薄れるのか。最近の事例を考えると、決して悪いことをしようと思っていないわけではなく、現場の方々は、なぜこのようなことが起きたのか一番混乱していると思う。しかし、外から見ると、なぜ?となる。1F事故を踏まえて取り組んでいるにもかかわらず、薄れてしまうのか。

(大橋) 一つは、人間は慣れるとうこと。どんな環境にも適応できる、強い適応力を持っている。事故は多くの影響をもたらしたが、原子力に関わっているからこそ、中にいるからこそ、それが日常で目の前にあるものなので、慣れ易い環境にあるのだと思う。

二つ目は、専門的に「認知的不協和の低減」と言うが、イソップ寓話の「すっぱいブドウ」がよい例で、キツネがブドウの木に向かって一生懸命ジャンプをしてブドウを食べようとしたがどうしても届かない。キツネは「どうせこのブドウはすっぱいのだ」と言って去っていくという話。自分が手に入らない不安定を何とか安定化させるために、どうせすっぱいブドウだから食べなくていいのだと思うことで自分を安定化させる。リスクに関わる仕事に関わっているほど、自分が不安定な状態にあることを何とか安定化させるために、自分の中に普通

の人よりも強い安定力を求めたり、あるいは無理な説明を作り上げたりすることはあり得る。
(大場) プロセス評価は重要だと考える。プロセス評価の中に、心理学的観点というか、本来人間はそういうものだよねというような視点が必要ではないかと思った。

(大橋) 1F 事故の各報告書で、分析や対策のところには人間の有り様という点がほとんど書かれていない。人間は機械ではないので、不安も恐怖も感じるし、あるいは使命感や高揚感も感じる。そういう中で、事故下の心理状態の中で、様々な対処が行われた。事故が起きたときにも対処しないといけないという人間であって、人間は機械ではないので色々変化するということをベースにして今後の対策を考えなければいけないし、事故分析は人間の心理も含めてしなければいけない。原子力関係者も人間であるということをしかりと踏まえていかないと、理解は深まらない。人間という存在をしかりとベースにした、対策にしても制度にしても必要。

防災訓練のときに、俯瞰するカメラで撮影しておいて、その映像の自分の姿を後で見てくださいと指摘する。自分がどうだったのか、自分という人間が事象の変化の中でどう変化したのかを自分で客観的に見ることによって、その後の自分への対処が変わってくる。そういう客観的に自分を見る機会を作ることが重要。それと同じようなことが、倫理的なことでも社会に対する対応でも、ビルトインできたらいいと思う。

(座長) チャットでいただいているご意見も踏まえて伺う。倫理委員会でも、倫理規程そのものがポジティブなメッセージを伝えるような、ポジティブな倫理とにならないかと努力している。人間というものを見た上で、ポジティブになれる、インセンティブを与えられるような点について、ご意見を伺いたい。

(大橋) 人間を動かすなら、ミクロの視点が必要。組織が得をし、組織が得をすることによって個々の構成員も得をするというような遠い関係では、人には響かない。もっと近いところで、行動を変えたら自分にとってこんな得があるとか、自分が楽になるとか、楽しくなるとか。そういうことをやっていかないと、一人ひとりをインセンティブによって行動を変容させるところには至らないと考える。

(座長) 次にコミュニケーションに関して。倫理という言葉が堅いイメージがあるが、倫理には、技術者は社会に対してどう説明していくかという点が含まれている。事業者は、いわゆる強いステークホルダーとのコミュニケーションはやるのだが、離れた人というか一般の弱いステークホルダーとのコミュニケーションが上手くできていないという指摘がある。先生のお話の中に、もはや誠実な業務への取組みだけでは限界というのもあったが、一方で、信頼ということを考えてときに、日常的な地道な取組みというのは大事だと思うが、いかがか。

(大橋) 何が信頼や安心に結びつくかという点について、私がかつて取り組んだ研究では、原子力発電所の“人の姿”を見せることが信頼や安心につながるという結果が得られた。現場の人の姿を見せることによって、この人たちに任せてもいいということが、信頼や安心を上げていくことにつながる。これは、倫理的な行動を促進するときにも、同様に考えられる点があるのではないか。

(会場) 安全文化の研究に携わっていたが、人間はこうあるべきと考えがちだが、本来、人間はこんなものなんだという実情を把握した上で考えないといけないとお話は、そのとおりだと思う。システムの設計をするときでも、人間はこう動くべきと手順書で規律されている。

そのような世界の中で人間を見ていると、ルールに書いてあるから人間はこう動かないとおかしいじゃないかとなり、そう動いていないのは情報がないからだとか教育が足りないとかに終始しがちになる。しかし、1F事故のときでも、事故に対処した方の行動は、手順書に書いてあるものではない。そのように人間は行動するということを前提に考えないと、機械は制御できても、人間は制御できない。人間の有り様をベースにした対策が必要になる。倫理規程や見解を出しても行動に結びついていないという悩みの点でも、会員一人ひとりがその見解をどう受け止めているのか、それを自分の“ワガコト意識”の方に持ってきているのか、そこを見た上でないと、幾ら情報発信をしても響いてこないと思う。インセンティブの話もあったが、やはり自分のワガコトと思えるようなところにインセンティブを持ってこない、人間はなかなか動かない。

(座長) 有意義な議論ができたと思う。議論を深めるにはよいテーマだと考える。倫理研究会などでフォローアップしたい。

以上